

「消化器超音波診断学」

千葉大学助教授 大 藤 正 雄 編著
 国立千葉病院放射線科医長 大 野 孝 則 著
 千葉大学講師 土 屋 幸 浩
 千葉大学講師 税 所 宏 光
 千葉大学医学部第1内科 木 村 邦 夫

奈良医科大学教授・放射線医学

打 田 日出夫

肝・胆・膵における小腫瘍の診断能が目覚ましく向上したのは超音波診断の発達によるものであり、超音波検査は消化器疾患の診断のみでなく、穿刺やドレナージによる治療にも不可欠な手段として定着した。聴診器と同程度かそれ以上の必需性と気軽さで日常診療において汎用されるようになった超音波診断も、習熟した技術と診断能力がなければ、十分に威力を発揮することができないばかりか、落とし穴にはまり誤診を招くことになる。序で著者は“簡便な操作で生体の内部構造を実時間で即座に観察し、診断することの利点に魅了されて積極的に臨床応用を行ってきた”と述べているが、まさに、手近にありながら、底知れぬ深さと妙味を持つのが超音波診断である。

消化器を中心とした腹部の超音波診断が目覚ましく進歩・普及し、本格的な消化器超音波診断学書の刊行が待ちに待たれていたときに、大藤正雄先生をリーダーとする本邦での第一人者のチームワークによる本書が発刊された意義は非常に大きい。消化器領域における超音波診断に関する著書は数多く出版されている

が、入門書的で図譜的な要素が強く、消化器疾患の超音波診断を系統的に記述した著書は皆無に近かった。専門的な學術書でありながら、初心者にも理解しやすいように配慮されている本書は、きっと多くの読者に、消化器超音波診断の本質を教示し、一層興味を深めさすであろう。この領域における著者らの御高名と御活躍は、今更私らの述べるまでもなく、常に本邦における指導的立場におられ、超音波の特性を最大限に発揮した独創的な多くの研究成果は、本邦のみでなく国際的にも高く評価されているのは周知のことである。

本書の特徴の1つは、鮮明な超音波像とこれを裏付ける肉眼像や組織像が対比して呈示され、更に多くの経験と蓄積から得られたシェーマや診断成績が要所に示されていることである。

結論としての超音波診断法では、超音波診断の特徴、位置づけ、適応、基礎的知識、装置と原理、用語、読影上の基礎、解剖、基本走査などについて、図解を混じえて要領よく記載され、上腹部を中心とした

超音波診断の基礎の習得と理解には比類のない内容である。

診断の各論は、肝、脾・門脈系、胆道、膵、消化器、腎、腹膜、腹膜腔、腹膜後腔・その他から成っており、腹部臓器のすべてが網羅されている。解剖、基本走査と超音波解剖、正常超音波像と各疾患の超音波像について詳細に記載されており、病理所見との対比による超音波像の解析と説明は、他の追従を許さないものである。

最後の章は、著者らが長年にわたり開発し発展させてきた超音波映像下・腹部穿刺法についての記述である。著者らによる名著「経皮的胆道造影一肝・胆道・膵の診断一」(医学書院)が出版されてから12年が過ぎんとしている今日、超音波を用いた安全で確実な穿刺法を確立し、経皮的胆道造影に限らず、経皮的生検、経皮的門脈造影、経皮的膵管造影、経皮的ドレナージなどあらゆる経皮的穿刺への応用を、ここに集大成されたことは、本当に喜ばしいことである。

本書は、消化器を専門とする内科、外科、放射線科医、腹部超音波診断に携わる機会のある医師や技師にとつての専門書としてのみでなく、一般臨床医や卒前・卒後教育の成書として推薦したい良書である。超音波装置の日進月歩する中で、今後も新しい症例の追加と改訂により、消化器超音波診断の必読の書としての座を、末永く保ち続けて下さることを期待している。

B5判 372頁 図96 写真690 1985
 ¥13,000 ㊦400

医学書院 刊